阿仏の旅

千葉　覚

現在・過去を問わず旅行記（旅日記）には興味深い内容が多い。作者の楽しみ・苦しみを感じ、おぼろげながらも自分も同体験をした気分になれるからである。それにしても「十六夜日記」にみられる作者阿仏の旅は苦しいものであった。老齢を押しての旅そのものが至難の業とは思うが、土地譲渡の訴訟問題をかかえ、さらに年若い為相・為守を京に置いての旅はさぞかし気の重いものであったろう。

東国下向の旅はその地その地を和歌に詠じての旅であるが、各名所・歌枕を実際目にしても心静かに観賞する余裕はなかったのではないかと思われる。

わが子ども君に仕へんためならで渡らましやは関の藤川（「関の藤川」において）

そして熱田神宮では

祈るぞよわがおもふことなるみがたかた引く潮も神のまにまに

雨風も神の心にまかすらんわが行くさきの障りあらすな

等の歌を奉納しているが、訴訟解決にまた旅の前途に神の加護を切に願う歌である。

宇津の山越ゆるほどにしも、阿闍梨の見知りたる山伏、行きあひたり。「夢にも人を」など、昔をわざとまねびたらんここちして、いとめづらかに、をかしくも、あはれにも、やさしくもおぼゆ。「いそぐ道なり」と言へば、文もあまたはえ書かず。ただ、やんごとなき所ひとつにぞ、おとづれきこゆる。

わが心うつつともなし宇津の山夢にも遠き都恋ふとて

蔦かへでしぐれぬひまも宇津の山なみだに袖の色ぞこがるる

伊勢物語の九段を念頭に置き、さらに業平と同体験を通しての感慨が述べられているが、その和歌は決して伊勢物語に陶酔して現実の憂き世を忘れた歌ではない。もちろん伊勢物語の感傷的な歌や描写をふまえての歌ではあるが、しばらく俗世の煩わしさ・憂さを忘れて「やさしくも」と阿仏が言うように優雅な世界に囚われて感傷的に作った歌ではない。風雅を体験してもつい現実の愁いを忘れ去ることができない作者を私は強く感じるのである。気の重い旅である。

ところが全部が全部このように沈鬱で感傷的な歌かというとそうではない。いたって平明淡泊な歌もあるが、特にその地に深く感動し堪能している歌や素直に景色に興じた晴々しい歌もみえる。読者として、私は少々安堵

感を覚える。ただその数は少ない。

あはれとやみしまの神の宮柱ただここにしもめぐり来にけり

たづねきてわが越えかかる箱根路を山のかひあるしるべとぞ思ふ

三島明神での歌であるが、神の加護を祈りながらもそこには鎌倉を前にして安堵する作者を感じとれる。まるで熱田神宮での歌と対応するかのようである。

ゆかしさよそなたの雲をそばだててよそになしぬるあしがらの山（「足柄山」において）

あづま路の湯坂を越えて見わたせば塩木流るるはや川の水（「湯坂」早川において）

何ら屈折した所もなく晴々として素直にその景物に興じている。これも目的地鎌倉に近づいたせいであろう。こちらも何となく安心する。

もう一つ印象的な箇所がある。歌枕「小夜の中山」の一節である。

ふかく入るままに、遠近の峰つづき、ことに山に似ず、心細くあはれなり。（略）あかつき、起きてみれば、月もいでにけり

雲かかるさやの中山越えぬとは都に告げよありあけの月

ここで「心細くあはれなり」の「心細し」は気が引ける程の不安・寂しさを示す否定的な意ではなく、一種の美的趣きを感じとった肯定的な意を含んでいる。その美的情緒が「雲かかる」の歌の「都に告げよ」という積極的な意志表示となって表われる。「都」はもちろん京にいる親しい人々（子供達と言ってもよい）をさし、無事歌枕で有名な小夜の中山を越えた喜びを詠んでいる。

ここで「都に告げよ」の表現だが、元来和歌で〝人に告げる〟と表現する内容は感銘深いことであり、それが肯定的なものの場合が多いと私は考えている。

わぎもこにかくとばかりやつげやらんかたみのかふくわはな咲きにけり（藤原知家）

きてみよとふるさとびとにつげやらんききしにまさるあまのはしたて（高階経章）

東にはかすみをせきの名にたててはるくることを人につぐらん（慈円）

右の例は花盛りであり、景勝であり、春の到来であるが、人に伝えたいと願う内容は悲観的・絶望的なものではなく、もっと躍動的・感動的なものである。百人一首の小野篁の歌「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟」のように、絶望・悲哀の心情を示す歌は少ないと思われる。

この阿仏の歌にもようやく小夜の中山を越えた喜びと同時に、つい沈みがちな作者の心を慰める暁の月、歌枕として古人の詠じた情緒に違わず期待通りの趣を呈しているという情感が込められていて、都の人に知らせたいという感情の高まりが感じられる。このような歌に私は特に興味を持てた。

ところで〝人に告げる〟だが私の旅行での体験をもってこの駄文を終りにしたい。記憶に新しい所では昨年末、新潟県六日町のとある居酒屋で蕗のとうの味噌汁をいただいことである。例年になく暖冬で雪が少なく採集しやすかったとのことで私には一足早い春であった。とても美味しくこれを我が女房に是非話したいという衝動にかられた。阿仏は暁の月であるが私は食い物である。まあ私はこんな程度のことである。実はもう一つ告げたい事があった。ただこれは女房に話さないつもりである。母娘二人で営むその居酒屋の娘さんは地元のお客が六日町小町と言う通りなかなかの美人であった。